

一栄谷 眞見 の 見聞私見



能性についても触れ
ている。

あらためて言うま
もなく熱中症による身
の危険と先の西日本豪
雨をはじめとする諸々
の災害は、温暖化を原
因とする一体化した現
象であり、まさに気象
庁予報官が語るよう
に、猛暑自体を「一つ
の災害」として受け止
めるべき状況にまでま
っているといえる。こ
うしたことも交えて隣

災害防止に

「潜在自然植生」回復を

「命にかかわる高温
注意報」には驚かされ
るという以上に、体が
素直にこれを受け入れ
ざるを得ない状況にあ
るといえる。気象庁予
報官が8月以降の猛暑
の見通しを発表した際
の「命の危険がある暑
さ。一つの災害と認識
している」とのコメント
には美感がこもる。

こうした折にIPCC
C(国連の気候変動に
関する政府間パネル)
による温暖化予測が新
聞で報道された。20
40年頃の気温上昇は
産業革命前に比較する
と1.5度上昇すると
いうものであるが、既
に2017年時点では
1度上昇してしまっ
ており、今後の23年で
0.5度の上昇を見込ん
でいる。これは産業革
命時の1880年から
2012年までは10年
で約0.06度の上昇で
あったペースが3倍に
加速されるということ
である。単に温暖化が
進行するだけでなく、
きわめて急速な温暖化
進行を見込む。温暖化
で1回に降る雨の量は
10%以上増加、陸域貯
留にともなう海の酸性
化、極端に高い潮位の
発生、生物を媒介にし
た感染症の拡大、食料
や水の確保の困難化、
等の影響が発生する可

大工さんと益を酌み交
わしながら議論してい
たところ、彼は災害場
面をテレビで見なが
ら大雨で土砂崩れを
起こしているところで
倒れている木は杉やヒ
ノキばかりで、これは
天災というよりは人災
だと語る。確かにそ
のとおりで、戦後住
宅用建材を確保するた
めに専ら杉・ヒノキの
針葉樹が植えられてき
た。近時は二酸化炭素
排出権や温暖化対策も
含めて植林が続けられ
てはいるが、バイオマ
ス利用等も念頭には置

かれながらも、経済林
としての基本的な位置
づけには変化がないよ
うに思われる。
ここで思い浮かぶの
が、3・11にともなう
震災復興として横浜国
大名誉教授である宮脇
昭さんが提唱された
「いのちを守る森の
防潮堤」構想である。
大津波によって発生し
た大量のガシマも利用
して、土とともに高い
マウンド(丘)を造
り、そこに土地本来の
樹種の幼苗を植えて
「被災した人たちの希
望の森、亡くなった方
々のための鎮魂の森、
いのちを守る二十一世
紀の鎮守の森」づくり
を呼び掛ける。宮脇構
想の根っこにあるのは
「潜在自然植生」とい
う概念であり、土地本
来の森は高木層、亜高
木層、低木層、草本層
からなる多層群落であ
り、深根性・直根性の
常緑広葉樹が主となっ
て、多彩な環境保全
・災害防止の機能を有
し、生物多様性を維持
し、陸域を吸収・固定
して地球温暖化抑制の
働きもするという。
3・11をきっかけに
この取組みは各地で拡
がりをみせてきたが、
これを海岸や都市緑化
ばかりでなく農山村に
も拡げていく。地形等
の条件を踏まえて経済
林と棲み分けさせなが
ら土地本来の樹種を増
加させ、日本の森の
再生を考えていくべき
時期にきているのでは
ないか。さほど温暖
化にともなう災害発生
の危険性が大きくなる
ことが懸念される。
(農的学会サイエンス研
究所代表)